

1. 頸椎ルーチン

適応疾患

椎間板ヘルニア，頸椎症をはじめとする頸椎疾患のスクリーニングとして最初に行う．

撮像プロトコール

基本形

T1 強調矢状断像

T2 強調矢状断像

T2 * 横断像（椎間に平行）

撮像の目的とポイント

頸椎椎間板の変性，膨隆などの確認．圧迫骨折，腫瘍などの病変のスクリーニングとして行う．

画像所見とゴール

最初に行う検査なので椎体，椎間板，脊髄が観察可能な条件で画像を作成する．

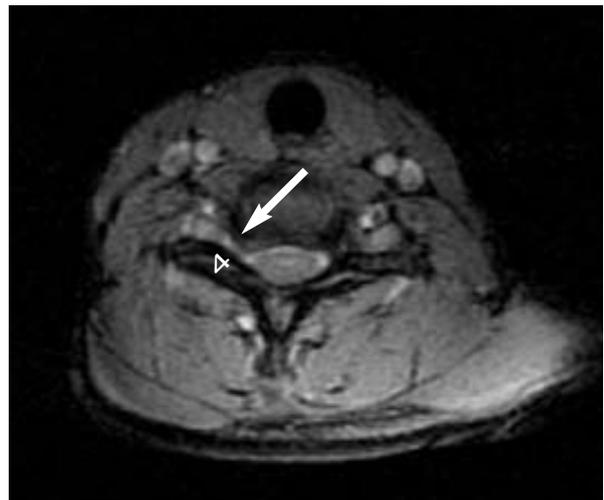
症 例

30 歳代女性．右手の痺れで受診．頸椎病変の検索のため MRI を施行した．



T2 強調矢状断像

C6/7 椎間板の膨隆が見られる（ ）。



T2 * 強調横断像

椎間板は椎体後方から右側に突出（ ），右神経孔（ 4 ）を狭小化している．椎間板ヘルニアであり，症状の原因と考えられる．

症 例

70歳代男性．単純写真にて頸椎症が疑われた．詳細評価のためMRIを施行．



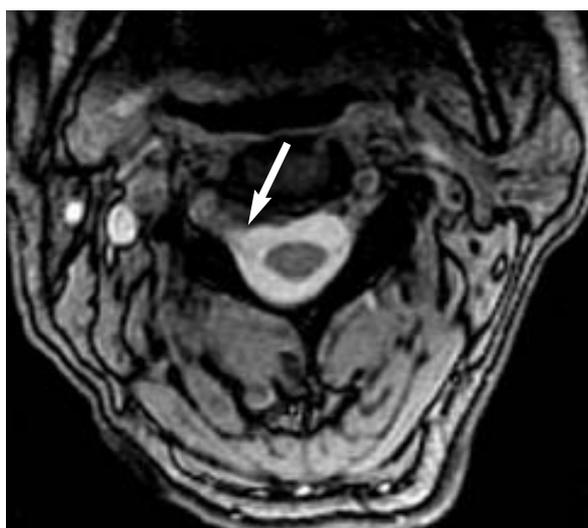
T2 強調矢状断像

C4/5, 5/6で椎体後方にわずかに膨隆する構造()が見られる．



T1 強調矢状断像

椎間板自体の変化はそれほどではない()．T2強調像と併せると，MRI信号に乏しい構造物の存在が示唆される．これは骨棘でしばしば見られる所見である．



T2 強調横断像

矢状断像だけでは病変の形態はつかみづらい．また神経孔との関係の把握も横断像が有用である．骨棘による右神経孔の狭小化が明らかである()．

症 例

80歳代男性．手足のしびれで受診．単純写真にて後縦靭帯骨化症と診断．詳細評価のためMRIを施行．



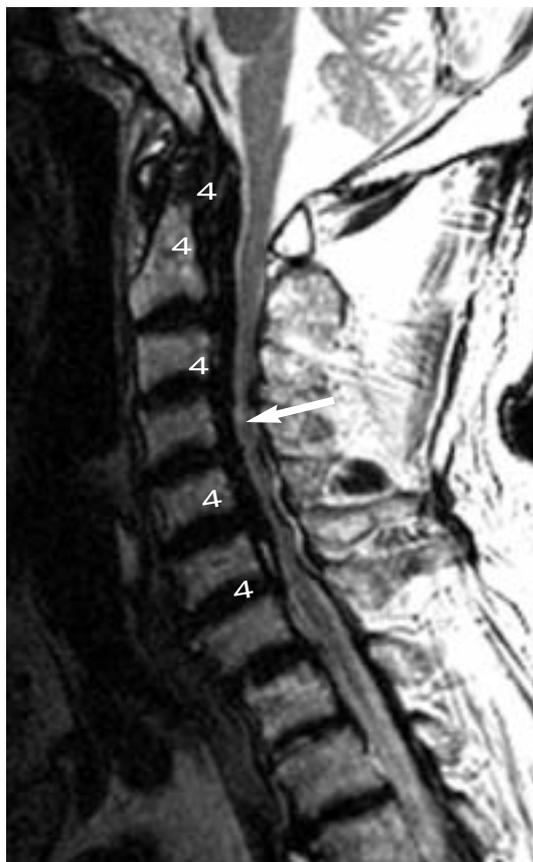
頸椎単純写真

C1から下方に続く石灰化病変が見られる()。



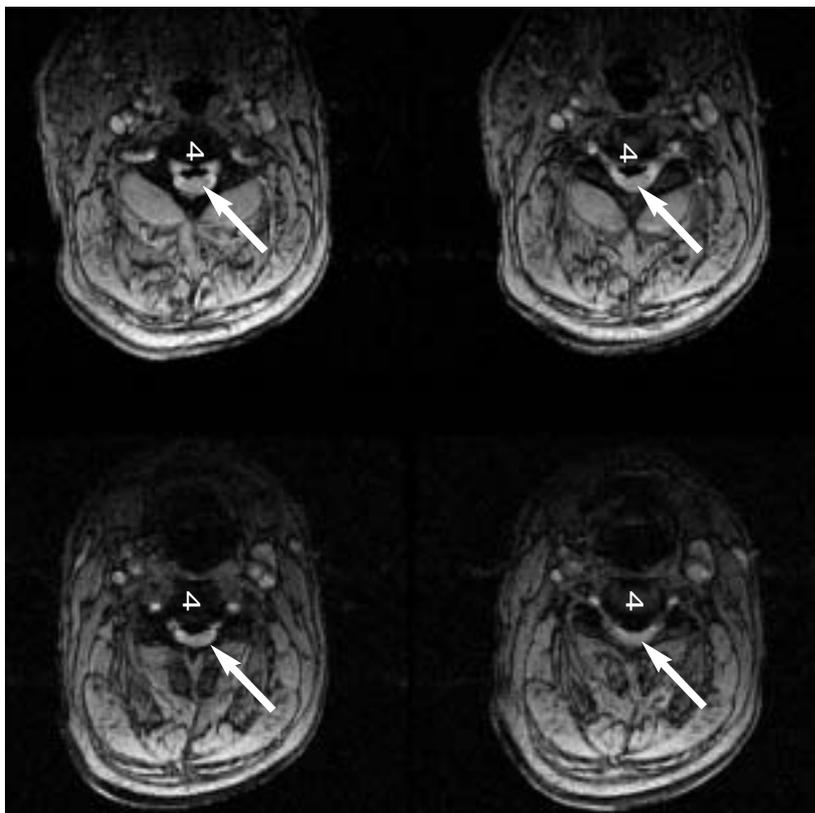
頸椎CT矢状断再構成像

強い石灰化を伴った構造物()が見られ、後縦靭帯骨化症と診断できるが脊髄の状態は評価できない。



T2 強調矢状断像

強い石灰化のため低信号域を呈する構造物が描出 (4) されている。脊髄は強く圧排され、一部圧迫による脱髄 (変性) を示唆する異常信号 () を伴っている。



各レベルでの T2 強調横断像

椎体後方の構造 (4) による脊柱管の変形が明らかである (で示す高信号域：脊髄と脳脊髄液が高信号として一体となって描出されている)。